

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

マチ類

アオダイ *Paracaesio caerulea*

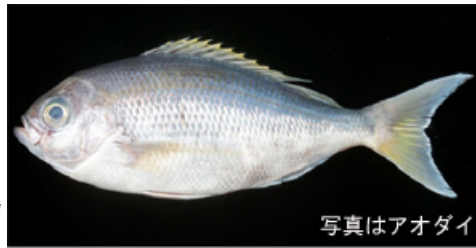
ヒメダイ *Pristipomoides sieboldii*

オオヒメ *Pristipomoides filamentosus*

ハマダイ *Etelis coruscans*

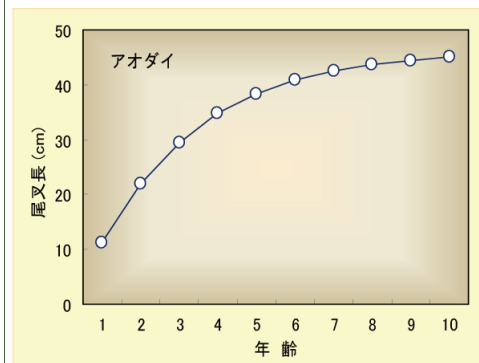
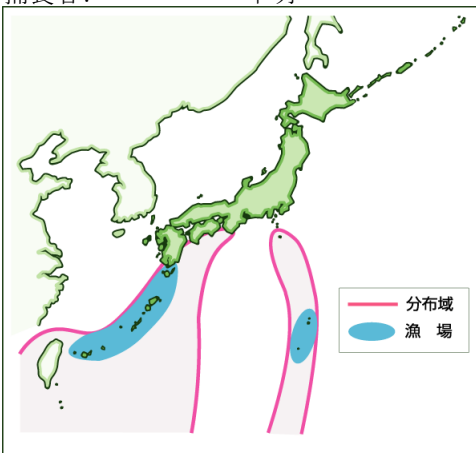
系群名 奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
 成熟開始年齢: アオダイは3歳(50%), 5歳(100%)、ヒメダイは2歳(50%), 3歳(100%)、オオヒメは3歳(50%), 5歳(100%)、ハマダイは13歳(50%)、20歳以上(100%)
 産卵期・産卵場: アオダイ、ヒメダイ、オオヒメは4~8月、ハマダイは4~11月
 索餌期・索餌場: 不明
 食性: アオダイは大型の動物性プランクトン、ヒメダイとオオヒメは魚類やヒカリボヤなど、ハマダイはイカや魚類
 捕食者: 不明

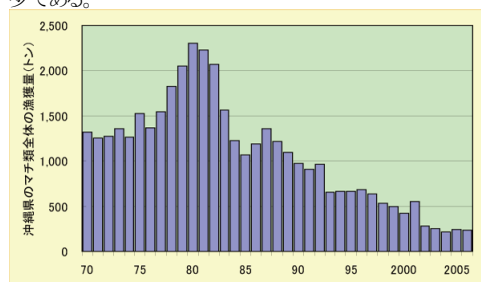


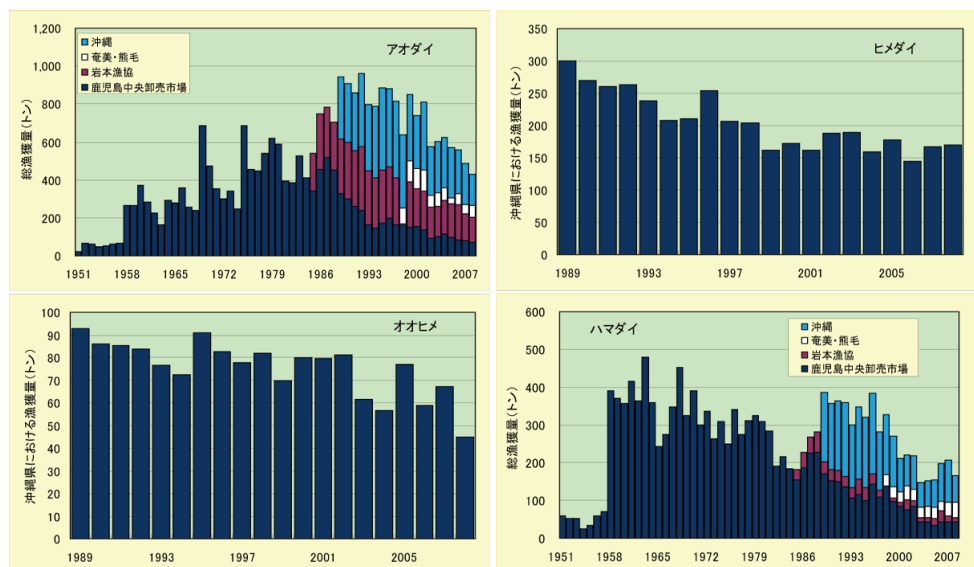
漁業の特徴

水深100m以深の深海底魚一本釣りによる漁獲が多いが、延縄でも漁獲される。周年操業する漁業者が多いが、ソデイカ漁(漁期11~4月)との兼業も行われている。1航海当たりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰りまたは2~3日、5トン以上の船で1週間程度。

漁獲の動向

沖縄県におけるマチ類全体の漁獲は、1980年に2,308トンの最高値を記録したが、その後の5年間に急激に減少した。近年5年間ではピーク時の1/10程度の漁獲量であり、主要4種の漁獲の動向は横ばいまたは減少である。鹿児島県においても1970~1980年代に最高値を記録した後急激に減少し、近年5年間の漁獲の動向は横ばいまたは減少である。



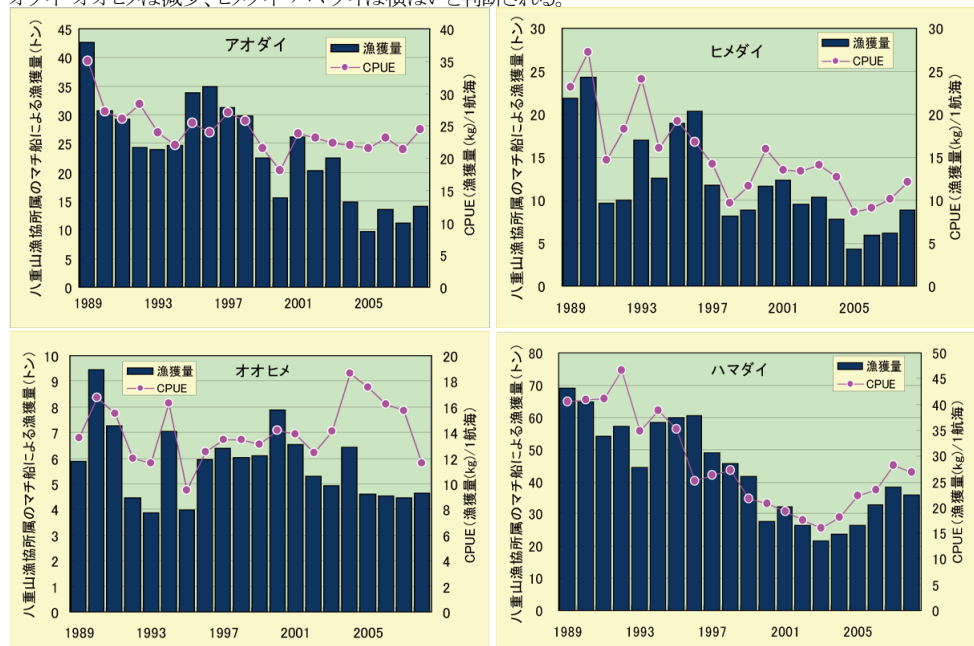


資源評価法

鹿児島県および沖縄県集計の漁獲統計による魚種別漁獲量全体の変動傾向を検討した。また、沖縄県に水揚げされるマチ類のうち、県漁連所属の標本船12隻および八重山漁協所属のマチ類船全体の漁獲量と漁獲努力量の情報を収集し、過去20年間の傾向を検討した。さらに、沖縄海域におけるマチ類4種の資源量を試算し、動向の判断の参考とした。

資源状態

1970～1980年代以降マチ類の漁獲量は急激に減少し、近年5年間では横ばいまたは減少状態が続いている。試算した資源量では、アオダイおよびオオヒメは5年連続で減少傾向が続いており、オオヒメに至っては近年5年のCPUEの減少も著しい。一方、ヒメダイおよびハマダイでは漁獲量・CPUE共に横ばいまたは漸増傾向にあり、減少傾向に歯止めがかけられたとも見られるが、依然として明瞭な資源回復の兆しが認められない。従って、資源水準は低位、動向はアオダイ・オオヒメは減少、ヒメダイ・ハマダイは横ばいと判断される。



管理方策

漁獲量の推移が資源状態を反映すると仮定すると、1980年代以降マチ類全体の漁獲量が急激に減少していることから、マチ類資源の水準は極めて低位であると判断され、早急に資源回復をはかる必要がある。平成17年に5年間の期限付きで資源回復計画に基づく18保護区が設置された。その結果、保護区内では一定の効果が現れはじめているものの、海域全体の資源量には反映されるには至っていない。今後は漁獲サイズ規制なども含め、保護区内のみならず、海域全体の漁獲圧を下げる方向で検討していく必要がある。マチ類は成熟までに早い種で3年、遅い種では10年以上を要することから、平成22年度以降も漁獲制限措置を講じる必要がある。

資源評価のまとめ

- マチ類4種の資源状態は低位水準、動向はアオダイ・オオヒメは減少傾向、ヒメダイ・ハマダイは横ばい状態
- ハマダイは産卵親魚が激減している
- オオヒメのCPUE・加入量・親魚量の減少は著しい

管理方策のまとめ

- 資源水準の回復のためには漁獲努力量の削減が必要
- 水産庁では2005年4月に資源回復計画を公表済み
- 保護区のみならず海域全体の漁獲圧を下げる方向で検討する必要がある
- 平成22年度以降も資源回復計画を継続する必要がある

資源評価は毎年更新されます。